

中国

私の生きざま！

東京都 小池 政治

一 おいたち

私は、大正三（一九一四）年一月十日に、当時は東京都北多摩郡砧村大蔵と言われたところの農家に生まれた。今の東京の世田谷区にある砧公園の真ん中である。柿の木や竹山がこんもりと茂っていて、全くの田舎であった。

後年、私が戦地にいたところに、非常事態が起きた際の東京都民の避難場所にするということで、命令によって強制的に立ち退きを命ぜられ、坪一

円五十銭ぐらいで買い上げられて、そこが砧公園となったのである。今でも我が家の二カ所あった井戸がそのまま残っている。

その大蔵の家で青年になるまで育ったが、平々な生活で、農夫として家の手助けをしていた。支那事変が始まり、当初の不拡大方針がだんだんと怪しくなり、拡大する一方だった昭和十四（一九三九）年五月に、とうとう臨時召集がきて、赤坂にあった歩兵第一連隊に入隊した。

二 戦塵にまみれる

私は、二十歳になったときの現役入隊時から機関銃手の教育を受けていたので、すぐに第三中隊の軽機関銃班に配属された。支那大陸では日夜激戦が続いていたことでもあり、すぐに第一線で役

立つようと毎日毎日激しい訓練が待っていた。俗によく言われていた、「飯の数より、びんたの数の方が多い」の通りであった。

七月には富士山麓の板妻での実弾射撃の演習、そして戦闘訓練などの実戦さながらの訓練に参加したが、真夏近い炎天下で、むんむんする草いきれの中、茅、しどめ、ばらなど棘のある灌木地帯をはい回り、水筒だけが頼りの飲み水で、朝早くから夕方日が陰るまで酷暑の中を、泥と汗と草いきれの演習には実際のところ参ってしまった。

忘れもしない七月十五日、演習場で突然に出勤命令が下令され、即刻、赤坂の連隊に戻った。

新しい軍服、軍靴、巻脚絆、そして下着上下に靴下など身の回りの品はすべて新品に代わった。当時はこれを一装用と言っていたが、その一装用で出勤準備が行われ、さらに一階級ずつ昇進した。

一泊二日の最後の休暇が出て、二日分の食糧として乾パンなどが支給され、それを携行して砧村

の実家に帰った。帰省した先で食事の心配をさせないようにとのことで、今で言う携行食であった。二日間の休暇などはあつという間に過ぎてしまい、中隊に戻った。

七月二十日、品川駅から日の丸の旗や大勢の人々の歓呼の声に送られて、軍用列車で出発した。支那事変が始まっているとはいえ、戦争ではなく事変であったので、すぐに解決するだろうという気持ちでいたので、あまり悲壮感はなく、見送る人も見送られる私たちも、お祭りのような華やいだ気分になっていた。

品川駅から大阪の梅田駅に向かい、今度はあまり人目につかないように、広い原っぱの真ん中に臨時停車して下車した。隊伍を整えて住吉神社に行き、参拝、武運長久を祈っての出陣式が行われ、それから天保山港に向かった。ここでは旅館などを借り上げていた仮宿舎に入り、船の準備ができるまで二、三日、日本での最後の日々を過ごした。訓練もなかったので体は楽だったが、応召

の将校や古年次兵などの中には、我々若い兵隊をしごく者もいて、あまり気分の良いものではなかった。このような事態に直面すると、人間の本性が現れてくるのだと、つくづく感じた。

私たちの乗った船は、「せのあ丸」という古い型式の貨物船だったが、それでも大きい船で約八千屯ぐらいはあったと思う。船倉には、弾薬や兵器、それに軍馬がところ狭しと詰め込まれていて、その上に人間が立っては動けないくらいの高さの棚が三段ぐらいあり、そこに兵隊が約三千人ぐらい詰め込まれていた。

天保山港から出る汽笛の音がもの悲しく聞こえて、船は岸壁を離れたようだったが、私たち下級兵士は甲板に出ることも許されずに、棚に横になっただけだった。今まで過ごしてきた家のことや、家族のことが頭に浮かんできて、寂しさがひしひしと押し寄せていたが、それをおくびに出すことなどは、もちろんできることではなかった。そんな女々しいところを古年兵などに見付か

れば、どんなにひどい目に遭うか知れなかった。

船が公海上に出るとやっとのことで、甲板などに出ることが許された。私も最上階の甲板に出て東シナ海を見渡したが、どちらを見ても海ばかりであった。船内はむせ返るような熱気が充満していたので、戻ることをせずに船上で涼んでいた。そのうちに海の色が濁り出してきた。あとで聞いたことだが、揚子江（長江）の水が海に流れて海水と合流し始めたのであった。五、六時間経つと、揚子江の河口に到着した。左手には、激戦地で有名になっていた呉淞砲台ウーソンが見えてきた。そのまま進むと、崇明島スウメイトウという幅五里、長さ三十六里といわれる中洲のような島があった。この島の特産物である白菜は、普通の玉で約十キログラムぐらいある大きな白菜だが、軟らかくておいしいものである。あとで知ったが、ここの産出量だけで当時の上海特別市での消費量を確保していたとのことだった。

船はさらに遡上して、南通（天生港）を右に見

ながら安慶へと進んだ。安慶付近は揚子江の中でも一番の難所で、渦巻く波の激しいことで有名で、四国の鳴門の渦潮どころの比ではない。一万屯級の船でも、航行に失敗すると丸呑みにされてしまうと言われていた。

ぜのあ丸は、その難所も無事に通過して南京に近づいた。揚子江の対岸では大砲や、機関銃の激しい音が響き渡り、戦闘の渦中に入ったような気持ちになった。周囲には輸送船が五隻いて一列縦隊になり、その前後を海軍の砲艦が警備しながらさらに進んで、無事に南京近くに接岸した。消毒液の入った箱に足を入れて消毒をしてから、大陸の土を初めて踏んだ。ときに昭和十四年七月二十五日であったが、以来、昭和十六年十月に現地除隊するまでの二年余りの、大陸における戦陣生活の始まりであった。

南京城の城壁は、想像していた以上に高くて大きかった。私たちは光華門から入城したが、揚子江の対岸のシシ山には残敵がいて、我が方に対し

て狙い撃ちをしていた。いよいよ戦闘態勢に入り、弾薬と食糧が中隊に支給された。

翌々日に忠山陵前を通って、鉄道線路に沿って玄武湖に向かったが、真夏のしかも炎天下での行軍は大変な苦勞で、暑さには全く参ってしまつた。帽子の中や下着の中に、野生のいたどり草を入れて暑さをしのいでいたが、三十分もすると煮詰めたようになってしまい、しょっちゅう取り替えていた。歩兵は弾薬、携帯食糧などを背負い、小銃などの武器を持つと約四十キログラム以上になるので、それはちょっと想像もできない苦勞があつた。次々に中隊員が倒れて、それをあとから自動車部隊のトラックで收容して玄武湖に追及していた。私は暑さには割り合いと強い方だったので、何とか倒れることもなく持ち堪えたが、今でも暑いときにはあの当時を思い出す。

玄武湖に着いたが、休むことなくさらに行軍は続き九江に向かった。このころになると飲み水が少なくなってきたが、この付近の水は飲料不適

で、飲むことが許されなかった。飲み水は廬山から運んでくるのだから、日本から送られたサイダーと同じぐらいの価値があり、全くの貴重品であった。飯盒炊飯にしても、水がないので口で米のごみを吹き飛ばして、そのまま飯盒に入れて炊いていた。付近に池などがあると、その水で研いで炊くので、出来上がった飯は茶色になっていた。水はただ飲み水としてしか使われなかった。

ある夜、池の向こう岸にいた友軍の歩哨が、月光で地平線からかすかに見えていたが、翌朝には五、六体の遺体が池に浮いていた。どこからか中国兵に狙撃されたのである。二、三日後、九江からさらに奥地に向かい、当面する目的地の河南省の南昌に向かったが、今度は行軍ではなく小型の船に分乗して、再び揚子江をさかのぼって南昌川に入った。揚子江と南昌川の合流する角地に当たる呉城で船から降り、焼け残っている支那家屋に分宿し、久しぶりに屋根のあるところでごろ寝となった。

天井にはこうもりがびっしりとぶら下がっていて、夕方になるとそれが一斉に飛び回り、騒音とふんをまき散らしたし、壁には、さそりがはい回っていたし、マリア蚊は密集してうなりをあげていた。ハエは柱という柱に上から下まで行列をつくってとまっていた。昼は熱暑にうだり、夜はそれらの害虫に悩まされた。雑草を集めて燃やして屋内を燻したが、そんなくらいでは全然効き目がなく、それよりも睡魔の方が強くて眠ってしまった。水にも随分と苦労したが、手回し式の浄水器で古池の水を浄化しても、五百人分の飲み水を作ることは容易ではなかった。この時代の中国での生活は、内地の人に話しても本気にされないくらいひどいものであった。

呉城には数日とどまっていて、南昌市街にかかると中正橋を渡って、南昌市政府跡の建物に入った。中正橋は約千五百メートルぐらいある長い橋で、水深もとても深く流れも速かったが、蛭が多く飛んでいた。

布施部隊の將兵に迎えられたが、彼らは数日後には任務を我々に引き継いで日本に帰れるので、嬉しそうな様子がありありと目に見えた。私たちは疲れをいやす暇もなく、翌日から南昌飛行場で昼夜を通しての戦闘訓練が開始された。ここでも訓練の激しさに加えて、ひどい暑さで随分と苦しんだ。夜は禪一本になり、銃だけを抱えて寝ていたが、約六メートルぐらいの長さの丸太が枕代わりとなり、みんなはそこに頭を並べていた。丸太の端をたたくと、それを合図に全員が飛び起きた。声を出すと敵に知られるので、音はつとめて立てないようにみんなで注意していた。第一線では、光と音は禁物である。

あまりの暑さで、夕方になると南昌川の川岸に行き、軽機関銃を据え、二十人ぐらいずつが交代で小銃を構えて警戒をし、そのなかで他の兵隊は裸になって、約五分間ぐらいの短い時間で水浴びをして暑さをしのいでいた。

南昌で数日宿営していたが、いよいよ第一線に

出ることとなった。敵に行動を察知されないよう行動はすべて夜間で、しかも中隊が一緒に動くことはできずに各分隊ごとに前進し、翌朝に目的地の丁法丁テーパーに着いたが、そこは激戦地の跡で軍馬の死骸が累々としていた。死骸は一応土で覆われてはいたが、覆いきれないところを野犬が喰い荒らしていて、目を覆いたくなるような惨状だった。戦死者の墓標を横目で見ながら最前線に向かった。

大砲や重、軽の機関銃などが、一斉に火を吹き始めたが、それは雷が落ちたようなものすごい音だった。最前線に到着するとすぐに、中隊長から命令が出た。戦死者、重傷者を後送するためだった。「決死隊志願者、三步前に」という命令があったので、反射的に私は前に出た。すぐにその線に出た者は少なかった。そのうちに左右を見回しながらだんだんと出てきて、三十人ぐらいになった。二人一組となり、棒一本と縄三本を渡された。それは、戦死者の背中と胴を結わえて二人

で担いで戻って来るための道具であった。銃剣と水筒だけを携行したが、これで敵兵とぶつかったら最後、戦うことは困難で、全くの決死隊であった。

敵方に向かって前進すると、草むらや大木の根元や田の中で、白い布を振っているのが目に入った。それは敵と対峙している兵隊が、そこに戦死者や負傷者がいることを知らせるための合図だった。雨、霰のごとくに降り注ぐ弾の中を、やっと戦友を抱えて弾のこない土饅頭のような所の陰に横たえて、胸を広げ水筒の水で血の出ているところをふき、それが終わるとすぐに次の負傷者を運んだ。みんな手を合わせて感謝してくれた。私たちも、すぐにこのような目に遭うのだと思うと気持ちが進まなかったが、無事に任務を終えた。その後、やはり最前線の新村シンジという部落に入り、その辺りの警備にいたが、今まで警備していた兵隊は、私たちと任務を交代すると後方に戻れるので、大喜びしていたが、その夜に敵の攻撃があっ

て一緒になって戦った。

そのころになると、私は軽機関銃手の神様と言われるようになっていて、ここでも名が通っていたので、すぐにトーチカに入って軽機関銃で射撃を開始した。トーチカの中はすぐに空薬莖からやつきょうの山ができたが、一カ所でこれだけ撃つことは、あとにも先にもこのときだけであった。この戦闘では、味方はだれもやられなかった。翌日、敵の退却した跡を見たが、そこに朱の房の付いた槍が一本落ちていたので、それを記念にもらってきた。

私の経験では、戦いはいつも日本軍一人に対し、中国軍五十人ぐらいの戦いであったが、日本軍は強かった。特にこのときの布施部隊の兵隊は、実に勇敢で強かった。

新村警備の任務は約十日ぐらいであったが、ある夜中のこと、土で固め芝を張って内部に枝を敷いたトーチカの上に立って歩哨の任務についていたら、すぐ目の前に一発、弾が落ちてきたので、それこそ大慌てでトーチカの中に入り危うく助か

るといふ、危険な目にも遭つた。

今度は隣部落の、マイオカマン（漢字は忘れてしまった）という小さな部落に移つた。ここは焼け残つた民家が点在していたので、そこに分隊ごと（カブ）に宿営したが、まだ敵兵が何個中隊もいる下部（カブ）策という村との間が田圃五、六枚（約五、六百メートル）ぐらいしかなく、その間に細い川があり双方共に川をはさんで警備していた。夕方、辺りが薄暗くなつたところに私以下二人が、命令で渡河点を探しに偵察に出た。私は軽機関銃を抱えていた。敵前での軽機は老人の杖と同じで、これが必要ならばどこにも出られない。

お互いに対峙していた三日後に、敵は追撃砲をもつて猛烈な攻撃を開始した。私の周りにも追撃弾が落ちてきたが、その一発は私のすぐそばにうなりをあげて落ちた。私はとっさに、そばにあつた戸板で身を隠したが、あとで見ると、その戸板には鋸の刃のようになった破片が無数に刺さつていた。戸板がなかったら、恐らく全身に破片が刺

さつて即死だつたらうと思う。危ういところで一命が助かつた。

そのうちに、食糧もだんだんと欠乏してきて一日二食となり、副食は塩漬けにされた鱒、粉みそ、高野豆腐、乾燥油揚げばかりとなつてそれを食べていた。何でもよいから口に入ればよかつた。

いつ敵の襲撃があるか分からないので、軍服、軍靴、それに腰の銃剣と弾薬箱を手放すことがならずに、辛い日々であつた。

後方からは三日に一度、輜重兵しちじゆうが一人で約四、五キロメートル後方の墓地の中まで運んで来るので、それに合わせて私たちも交代でそれを取りに行つた。敵の機関銃が常に狙いを定めているので、大きな姿勢をするとすぐに撃ち出すので、体を低くしていくので大変な苦勞であつたが、これを取りに行かないと食べる物がないので、必死の思いであつた。缶詰の空缶に穴をあけて、その中に小石などを入れて鳴子を作り繩を張り警戒して

いた。ときどきこの鳴子の上に蛇が来ていた。この蛇は横縞の約二尺ぐらいの長さだったが、これを捕まえて皮をはぎ、頭と尾を落として飯盒に入れて上から米を加えて蛇飯にして食べ、残った骨は焼いて栄養補充にしていたが、蛇には随分と世話になった。これが唯一の栄養源であった。

我々が苦戦をしていると、後方の野砲が援護射撃をしてくれる。そうすると、敵はびしやりと撃ってこないで助かった。また、夜間は照明弾を打ち上げてくれるので、真っ暗闇でも蟻のはっているのもよく見えるぐらいの明るさだった。野砲隊には随分助けてもらった。

十二月になると、大阪の部隊の現役兵が来て警備を交代したが、慣れるために二、三日一緒にいたが、我々が後方に下がったすぐあとで敵の大攻勢があつて、大阪部隊は大分苦戦をしたらしい。我々は再び南昌に無事に戻り、久しぶりに軍靴と巻脚絆を取って寝ることができた。

南昌では、今までの所属部隊であつた布施部隊

から離れて、上海警備の第八七独立大隊の所屬となり、上海警備の任務に就くことになった。久しく駐留した南昌市政府跡から転出した。

南昌川に架かる中正橋は敵によって破壊されたが、工兵隊が丸太を何千本も使って修理し、歩いて渡れるようになっていた。橋を渡り南昌駅から列車に乗ったが、約千人近い部隊は数回に分かれて出発した。機関車は、自動車に汽車用の鉄輪を取り付けたもので、速度はあまり出せずにそろそろと走ったが、修理箇所にかかると、ぎいぎいと不快な音を出し、今にも壊れるのではないかと冷や冷やしていたが、列車もゆっくりゆっくりと通過した。列車は永修河までで、そこからは小舟を十五隻ぐらい並べて、その上に板を乗せた舟橋を渡って対岸に到着した。十二月末で冷えていたので、河べりからだんだんと氷が張ってきたことを今でも冬になると思ひ出す。徒歩と鉄道と舟を使って、約十数日かけて上海に到着した。

上海警備と聞いていたので、上海に着いてはっ

とし、これからは当分楽だなど思っていたら、部隊はさらに黄浦江を溯行して文問モンモンに到着し、そこで中隊ごとに別れて杭州湾の金山衛城キンザンエイジョウの警備についた。

この辺り一帯は塩田地帯で、中国では珍しい塩の生産地であった。海と銭塘江の河口とぶつかり合った所で、海とも言えるし河とも言える所であった。対岸は肉眼では見えないくらい広く、東京から小田原ぐらいの距離ではなかったかと思うが、実に大陸的な所であった。海水を砂場に汲み入れて干し、そのうえにさらに海水を流すということを数回繰り返し返すうちに、白い塩の層ができて、それを掻き集めると立派な塩が出来上がるのであった。

我が内山中隊の主力は金山衛城に入り、私たちの第三小隊は、約三里ぐらい手前の張堰鎮チヤウエンジンの警備に任じた。人員約四十五人で重機関銃一丁、軽機関銃二丁、擲弾筒二丁が主要な武器であった。食糧、弾薬は、国産のヤンマーディーゼルのエン

ジンの付いた舟艇で、クリークを約二時間かけて中隊本部まで受領に行くのだが、ある日、私たちが物資受領のために中隊本部に到着すると、金糸呂橋鎮にいる第一小隊が敵襲により苦戦しているという現住民からの情報が入った。すぐに中隊長の命令で、乗ってきた舟艇に山砲を積み込んで現地向かった。クリーク両側に対する警備は私が一人で軽機を担ぎ、弾は雇い入れた中国人の農民三人に持たせて、弾の飛んでくるクリークに沿った土手道を前進した。敵の射撃が激しくなると土手に伏せ、ちょっと射撃が緩やかになると立ち上がり前進した。金糸呂橋鎮に着くと同時に舟艇上の山砲が火を吹き、私の軽機も銃身が焼けるように撃ちまくった。敵はたちどころに四散してしまったが、小隊長の石黒少尉は顔から血を流していて、今少しのところまで戦死したかもしれない。救援に来たことを感謝された。

そのうちに上海地区は雨期に入った。約一カ月ぐらい毎日毎日強い雨が降り、今度は雨との戦い

となった。

そのころ留守宅から手紙が届いた。文面には東京が空襲などでやられたときの、都民の避難場所が必要であるということから、我が家のある砧村大蔵の住民に立ち退き命令が出て、坪一円五十銭で買い上げられたので、渋谷区内に移ったというようなことが書いてあった。当時のご時勢なので文句を言えず、泣き寝入りであったとのことだった。

張堰鎮一帯は、春は菜の花畑、夏は綿畑と化して一面真っ白となり美しかったが、その畑の中に便衣隊が潜り込んでいたので油断がならなかった。ここで約半年を過ごしたが、その間にも幾多の作戦に出ていたが、どうにか無事で軽機関銃の射手としての腕はますます上がっていた。張堰鎮では比較的平穏な日が続き、原住民とも仲良くなっていて平和なひとときを過ごしていたが、金山衛城の中隊本部と合流することになり、ここを去った。原住民は別れを惜しんで涙で送ってくれ

たが、このことは今でも忘れられない思い出である。

昭和十六年二月、金山鎮城の警備を他の中隊と交代して、上海特別市警備隊の所属になり、楓林橋地区の警備に任じた。ここはフランス租界との境界であり、静かな所であった。

十月になって、やっと除隊命令が出た。しかし除隊命令はこれが最初ではなかった。それまでに三回も命令は出ていたが、作戦、作戦の連続で、延期、延期となっていたのである。軽機関銃の神様がいないと戦闘も不利になるというのであった。しかし、今度は間違いなく除隊である。除隊命令が出ると、実際に軍服を脱ぐ日までは本来の任務から離れて、本部の事務室で軍事郵便の検閲、弾薬等の補給業務、武器の整備、糧米の確保などの仕事に任ずることになる。

一緒に除隊命令が出たのは三、四人だったが、私は中隊長が保証人になって、一人だけ現地除隊をすることになり、他の除隊兵は在隊間の勤務成

績があまり良くないので、内地で除隊することになった。

三 上海で民間人になる

現地除隊というのは簡単にはできないことだった。まず中隊長が保証人となり、両親と本籍地の村長の承諾書が必要とするなど、身許の確認と同意が重視されていたが、人間はどこに行っても正直で真面目でなければならぬとつくづく思った。これらの手続きが終わった昭和十六年十月二十日に、めでたく除隊をしたが、これまで命があつて良かったとしみじみ思い、感謝したものである。

新しい勤め先は、上海特別市中央市場職員として、中央市場の警備隊に入社した。除隊当初には寝る部屋もなかったもので、警備隊の休憩室で生活をしていった。手持ちの金も少なく食費にも苦労したので、近所の食堂で月末払いを交渉して話をつけ、それからは安心して食事ができて嬉しかった。

月末二十五日に初めての給料袋をもらったが、その嬉しかったことは今でも忘れられない。給料は、基本給二百二十円に、警備手当が三十円ついていた。月を経るに従って、だんだんと家財道具もそろってきて、生活は安定してきた。

昭和十六年十二月八日午前四時、日米開戦となった。黄浦江上には米、英の砲艦が停泊していたが、日本軍の降伏勧告により英国砲艦はすぐに降伏したが、米国砲艦は降伏を拒絶したので、ガーデンブリッジの近くの江上にいた我が方の砲艦の砲撃ですぐに沈没したが、前日が日曜日だったので米水兵の大部分は上陸していたので無事であった。

市場では軍隊経験者が指導員となって、職員に対して軍事教育が始まり、銃声、砲声、響き渡って、戦場のような様相となり一般市民はみんな腰が抜けるようなさまであった。

入社して四、五カ月経ったころになると、業務科、記録科、出荷科、入荷科、集荷科、軍納部の

六つの組織の股長（科長）を一人でやれという市場長の命令が出て、致し方なくその責任を負うこととなり、朝早くから夜まで働いた。時には夜中でも起こされて現場に出て行くこともあった。中国人相手であるので、上海語でなければほとんど通じなかったが、日常の簡単な言葉は除隊以前から勉強していたので、不自由なく話すことができた。頼られてしまい、役職が重くのしかかっていた。この六つの職域に勤務していたのは、日本人職員を含めて三十六人であった。

中国人の特性として、仕事の上はもちろんのこと、日常生活においてもすべて階油（カイユいわゆるコミッションのこと）が平然と行われていて、最初のころはこれを防止しなければと思っていたが、それはなかなか難しいことであることが分かり、そのうちに逆に利用することにした。何せ正しい入荷、出荷記録を作ることには大変なことであったし、軍納部は日本軍に納める仕事で大量とスピードが要求されていたので、階油を利用することは

致し方のない手段であった。

戦争がだんだんと苦戦状態となってきたころには、日本軍の使用する食糧と、代用燃料としての高粱酒の買付けには毎日大変な苦勞をしたし、命懸けでもあった。

私の股長としての手当は相当の金額となっていて、部下三十六人を月末には共同租界にある料理店に連れて行ってご馳走をした。みんなは大変に喜んだが、このことが終戦になってから大変に助けられたものだった。「小池先生への恩返し」とばかりに、当時の中国人部下が、人目につかないようにして自分の家に招待して、いろいろともてなしてくれた。いつの世でも、国籍や人種を問わず、恩はだれも忘れないものであると思った。

終戦が近づくころになると、防寒服を着た日本兵が続々と満州から上海周辺に移動してきた。上海決戦と称して百万の軍隊が集まったのである。

その食糧調達だけでも大変な仕事となった。毎日、幾十隻というジャンクを集めて野菜や、馬鈴バレイ

薯^{シヨ}や、タマネギなどを集めて納入した。また、食料だけではなく兵隊が寝る布団代わりとなる「寝わら」を集めて納入することも大変な仕事であった。しかも、日本軍への納入はすべて市価の半分で、その交渉が大変だった。もちろん日本語では通じず上海語が必要であったので、私が頼られてしまった。交渉するときは、ポケットに連発の拳銃を忍ばせ引き金に指を入れたままで話し合いをしていた。ときには、日本軍が私たちの身辺を護衛してくれることもあった。

会社の仕事もおおむね軌道に乗ったので、昭和十七年十二月に内地に帰省した。出征以来、三年半ぶりであった。出征するときに饞別をいただいた家々に、もうそのころには貴重品扱いであったタオル、晒地、砂糖などを持ってお礼に回ったが、随分と喜ばれた。

そして親類の仲人で、大正九年十月生まれの石井トモと見合いをして結婚し、翌年の十八年一月下旬にトモを連れて上海に戻った。会社に顔を出

すと、そこには十二月分の給料とボーナスが待っていて、数日すると一月分の月給も手に入り相当の金額となり、トモもびっくりしていた。そのころの内地では、五、六人の家族でひと月百円もあれば十分に暮らしていける時代であったので、トモが驚くのは当たり前である。

昭和十八年ごろの上海では、二十円も出すと豆炭の入っている四角のかご一杯の卵が買えた。約二百五十個ぐらいあったと思う。それが、昭和二十年春には同じ卵一個が九十円ぐらいに急上昇した。日本の敗戦によってさらに高騰して、昭和二十年暮れには一個二万円ぐらいになった。コップ一杯の水が二千元ぐらいしていた。

日本人の職員は、毎月の給料は現金の他に強制的に五百円券、二十円券、十円券の戦時債券で支払われていたが、この債券も敗戦によって紙くず同然となってしまう、随分と悔しい思いをしたものだった。

仕事は相変わらず忙しく、一日の取扱いは多

いときには当時の金額で四十億ぐらいであった。軽トラック一台に山と積まれた札束は、約十五億円ぐらいであった。

四 終戦そしてその後の生活

昭和二十年八月十五日の正午、この日天皇陛下の玉音放送があるということで、上海中央市場南市分場の日本人宿舎に日本人職員と、その家族が全員集まった。私が責任者であったので代表してラジオのスイッチを入れた。内容は、日本の無条件降伏についてのお言葉で、全員悔し涙でただ呆然とするだけであった。社員の中から、「共同租界に斬り込もう！」というような話まで持ち上がったが、「我々はそれでもよいが、残された女、子供はどうなるのか？」ということから私は、「絶対に駄目だ」と言って止めさせた。

一夜明けると、上海市街の様相ががらりと変わってしまった。日中から中国人による市内での略奪、暴行が随所で始まり、土足で日本人の家に上がり込み、何から何まで持ち去っていくが、

我々はただ見ているだけで、手の出しようがなかった。家からは追い立てられて、どこに行くというあてもなく逃げ回る始末であった。腕時計は略奪されるし、履いている靴は脱がされた。女、子供には泥や、石ころを投げつける。慌てて荷車に身の回りの物などを積んで逃げ出すと、それを追い掛けて来て強奪していくという有様で、日本人領事館も手のつけようがなく、ただただ傍観するのみだった。

私は当時、南市裡馬路恒興西里という所に住んでいたが、その辺りに住んでいた日本人職員たちと、大八車に家財道具を積んで虹ハンキョー口に逃げたが、同僚だった中国人が守ってくれたので、略奪などに遭わずに無事にガーデンブリッジを渡り、ブロードウェイマンション（当時はブロマンと呼ばれていた）の近くの家にたどり着いた。ここは、中央市場職員が住んでいたが、終戦時は空き家となっていたので幸いであった。そこに一応落ち着くことにした。

あったので、これを買って売ろうという話が始まったが、そんな危ないことは駄目だということ、お金を出す人がいなくなり、私と他に一人だけが賛成したが、調達できた金は約六百万円だけであった。それでは少ないということから、さらに知人を探し回ってやっと三百万円を借りることができ、計九百万円を資本にして砂糖を買い取った。すぐにトラックで運び出して家に持って来た。二、三日かからないうちに全部売れてしまった。知人には元本と利子を合わせて三百万円をすぐに返済した。この砂糖の商売ではすぐ儲けさせてもらった。この売上金を資本として、今度は野菜の仕入れをすることになり、中国人のブローカーと話し合いをした。

そのころになると、南京や蘇州太湖付近やその奥地からの引揚者が、虹口の小学校に大勢集まっていたので、そこで野菜や砂糖などの食料品の注文をとった。夕方に注文を受けて、翌朝から午前

中の間に品物を届けるという段取りで商売をしたが、忙しいことだったがだれにでもできる仕事ではなかった。この仕事も、上海語が話せたからであった。この仕事は昭和二十一年の一月まで約半年続いた。しかし仕事は順調なだけではなく、ときには悔しい思いをしたこともあった。砂糖の売買で得た三百万円をカバンの中に入れて持ち歩いていたが、あるときに中国軍の将校が、拳銃所持の検査ということで私たちの所持品検査をしたが、そのときにカバンの中にあった三百万円を取っていった。全く悔しかったが、手を出すこともならず、泣き寝入りするだけだった。

物価はだんだんと高くなり、昭和二十年の末ごろには、卵一個二万円、米一升四万五千円、二十本入りの巻煙草四万円、飲料水がコップ一杯二千円、豚肉一斤が四十八万円、砂糖一斤三十万円というべらぼうな値段となった。一週間で倍値になった物もあった。野菜を麻袋いっぱい詰めて売ると、その麻袋にお札が五分の一ぐらい入っ

た。売った目方の五分の一のお札で、馬車で札束を運んだくらいであった。

引揚げ開始まで、毎日忙しい仕事が続いていた。

五 引揚げ開始

昭和二十一年一月に、日本に引き揚げることとなり、荷物はリュックサック一個に手に提げられる物一個と制限され、食糧は一日分だけということになったので、身に着ける物は一番上等の物を着て、下着も二枚ぐらい重ね、ズボンも二本はいた。体の自由が利かなかったが、日本内地での物の不足のことを聞いていたので、みんなはそれぞれ創意工夫をして、少しでもたくさん持って帰るようになると思い努力した。

昭和二十一年一月二十一日、上海市政府前の広場に集められて、荷物の検査が始まった。各人の前に携行している品物を全部、一品一品整理して並べ、中国人の検査員によって検査されたが、検査員は上海語で言うので、上海語の分からない者

には通訳が必要となり、私が話をしてやった。案外うるさくなく検査が終わり、引揚げ船の船着場である黄浦江岸の呉淞の碼頭飯田棧橋まで、約一時間ばかり歩いて移動させられた。

乗船する船は、約八千屯ぐらいある「江の島丸」という貨客船であったが、約四千三百人ぐらいの引揚者が乗船を終わるまでには大分時間がかかり、ひと晩そのまま停泊して翌朝早く出航した。呉淞砲台を左に見ながら、揚子江の河口から東シナ海に出た。

昭和十四年に兵隊として中国に渡り、以来約七年間、今は民間人として家族を連れて日本に向かうことは、感慨無量なものであった。

東シナ海を航行中、船の下を百頭近いイルカが、長さ一キロメートルぐらいにわたって列を正しく組んで泳いでいくのを見た。我々と別れることを惜しんでいるようにも見られた。揚子江から流れ出る水はだんだんと濁りを増して、東シナ海特有の海水となっていたが、平穏な航海が続ぎ、

我々の心はひと足先に日本に着いていた。

六 江の島丸沈没、再び上海へ

出航翌日の一月二十二日の午後四時十分ごろ、江の島丸の船体は突然ものすごい衝撃を受けて、後部からどンドン沈み始めた。終戦前に日本軍の敷設した磁気機雷にぶつかつたのだつた。船中は、上へ下への大騒ぎとなつた。洋上には左の方はるかかあなたに、米軍の上陸用舟艇（L・S・T）が見えたが、こちらの異変には気付かない。しばらくすると別の船が、我々の江の島丸の異変に気付いて近寄つてきた。我々は助かつたと思はれ、一斉に甲板に出ようとしてパニック状態となつた。すると甲板上で銃声が五、六発したので、みんなはやつと我々に静かになつた。両船の船長が話し合い、船と船の間に板が五、六枚掛け渡された。江の島丸の船長の指示で、まず、女、子供、そして老人が先に渡り始めた。しかし、激しく上下する船の上の狭い板を渡るのには至難の業であつて、みんなは真剣になつて渡つてい

たが、真剣になればなるほど足もとがふらつき、逡巡する者も多くいた。落ちれば終わりである。船と船との間は六、七メートルぐらいあいているし、高さも大分違つていた。下を見れば波が逆巻いていて、恐いどころではなかつた。ときどき、足を踏みはずして落ちてしまう人もいた。落ちたら最後、波にもみ消されて助けることなどとてもできなかつた。

小さな子供は、船から船に投げ渡しである。何と言つても、一刻も早く全員が移乗しないと江の島丸は沈没してしまう。海上は、波浪と強風とそれに真冬の海の上の寒さで、それはそれは大変だつた。母親は乗り移つても、投げ渡された子供を受け取らねばならず、心は焦るばかりであつたが、足がすくんでどうにもならない。江の島丸は乗船者の気持ちにはかまわずに、どんと沈んでいったが、神の加護か、幸いに残つた者が何とか移乗するまで沈まないでいてくれたのが、不幸中の幸いであつた。

救助してくれた船は、米海軍の船で「ブリーパード号」で、船長はエリオール・エリオット海軍大尉であった。海難救助としてあの荒れた海の上で、船と船を板でつなぎ乗員を避難させるということは、なかなかないことであつたそうだ。これはあとで知つたことである。

後日談だが、昭和三十八年十月にエリオール・エリオット氏夫妻が来日された際に、当時の者が集まつて謝恩の会を盛大に行つたし、NHKTV「私の秘密」にも出演してもらつた。我々の命の恩人である。

移乗するときにはもちろん、荷物などは持ち出すことはできずに、それこそ着のみ着のままだったが、ただ水筒とあめ玉を持つた方が良いという話が伝えられて、私もそれを持つていたが、移つてからの赤ん坊のミルクを作るのに提供したり、泣きわめく子供にあめ玉をやつたりしたので、すぐになくなつた。男たちは、上海に戻り着くまでは飲まず食わずでつらい時間を過ごした。

救助してくれた「ブリーパード号」は、江の島丸より小さかったので、船室には女、子供と老人を主にして、元氣な若い男は甲板上で一夜を明かしたが、真冬の東シナ海のこと、霜は降り冷たい風は強く、ふるえて過ごしたことが印象に残っている。一番困つたことは、船内に入つていた人たちの排せつ物の処理で、小水はバケツリレーで下から手渡しで甲板まで持つて来たが、途中で船が大きく揺れるとこぼれてしまい、大変だった。大便の始末も男が担当した。

一昼夜の航海の後に、無事上海灣に戻り再び飯田栈橋を渡つて、めいめい以前の所に戻つた。江の島丸の沈没のことが知れ渡つていたので、まだ上海に残つていた親族や友人知人が栈橋まで出迎えに来ていて、お互いの無事を祝い合つた。

約一週間ぐらい経つて、再び引揚げの順番が巡つてきた。今度は「名優丸」という船であつた。前回残置してあつた物から必要品を持つて、再度飯田栈橋に向かつた。幸いにも所持品検査

が、以前よりも厳しくなく、楽な検査だったので助かった。

七 祖国の地を踏む

引揚者は、中国側に一人当たり日本円で一万八千円を支払わないと許可されなかった。金のない者は帰国できずに、そのまま上海辺りに残った人も大勢いたことと思う。

名優丸に乗り込み、再び帰国の途についた。江の島丸の沈没した場所では、全員で黙禱し無念にも犠牲となった人たちの霊を弔った。船も汽笛を鳴らして、二、三回ぐるぐると回っていた。この航海の間にも、船内で亡くなる人が続き、その都度遺体を白い布で包み、錘を付けて海に投げ入れ、汽笛を三度吹鳴して慰霊した。

上海を出て九日目に、今度は何事もなく無事に鹿兒島湾に入り、天保山沖に一時停泊しその後、鹿兒島港から上陸した。手続きを終えて天保山の小学校の校舎に収容されて、そこで引揚げの手続きをして、各人がそれぞれの帰郷先に向かった。

鹿兒島港に着いて、各人はそれぞれ携行品を岸壁に山積みにして、ほっとひと息ついていたところ、その荷物を盗みにくる市民がいたので、私たち屈強の男性は寝ずの番をしたが、南の鹿兒島といえども真冬二月の末は、やはり寒気が厳しくて苦勞したものだ。そのため盗まれたものは少なく、みんなは無事に自分の物を持って引揚列車に乗ることができた。

空襲で鉄骨だけになっていた鹿兒島駅から各駅停車の列車に乗ったが、窓にはガラスがなく冷たい風が吹き込み放題であった。すぐに満席となり、窓から出入りをしていった。もたもたしていた人たちは、取り残されてしまった。次の列車はいつになるか分からないので、少なくとも五、六時間は鹿兒島駅の吹きさらしのホームで待ったことであろう。

鹿兒島駅から大阪駅まで約三十六時間かかり、立ったままで眠ったりしたが、そのうちに足ががくがくしてきた。大阪からようやく座ることがで

きてほっとした。大阪駅からさらに、二十四時間かかって、やっとのことで東京駅に着いた。乗っている時間だけでも実に約六十時間以上だった。その間、飲み水は少なく食べ物もほとんどなく、腹はぺこぺこだったが、その反面大、小便には苦しまなかった。

出征まで生活していた砧村の家は、強制疎開でなくなっているので、渋谷区の新しい家に無事に戻ることができた。家族は突然に姿を現した私たち家族を見て、初めはびっくりして声も出さなかったが、しばらくしてやっと我に返って狂喜して迎えてくれた。つもる話で数日はあつという間に過ぎてしまった。

八 自立、再生

働かなければ食べられない時勢であったので、のんびりと疲れをいやす暇はなかった。多くの人が仕事を探していたが、世間は敗戦のショックから動きが悪く働く場所がなかった。私は上海時代のことを思い出し更地の土地が広く遊んでいたの

で、そこに里芋など植えて百姓のまねごとを始めた。予想以上にいろいろと良くできたので、収穫した野菜類をリヤカーに積んで渋谷駅前に行き売った。その売上げで、青空市場から食糧を買ってくるといふ生活をしばらくしていたが、いろいろと難しい問題が出て数カ月でやめた。そのうちに露天商の許可証を区役所から受けて、自由な商売が始まった。

それからは、戦後の混乱期の中を家族を抱えて生きていくために、いろいろな仕事を必死になつてしていたが、運も良かったのかだんだんと成功し、何とか九十歳の今日まで生きることができた。